韓国語学習者作文コーパス（KC *C*orpus）と韓国語教育への活用

KC *C*orpus (Korean L2 Learner's Written Composition Corpus) and its application in education

林 炫情（山口県立大学）
Hyunjung, Lim
（Yamaguchi Prefectural University, Japan）
李 在鎬（国際交流基金日本語試験センター）
Jae-ho, Lee
（The Japan Foundation, Center for Japanese-Language Testing, Japan）
黄 晟媛（立命館アジア太平洋大学）
Jung-nan, Hwang
（Ritsumeikan Asia Pacific University, Japan）
浅尾　仁彦（SUNY Buffalo/京都大学）
Yoshihiko, Asao
（Doctoral Student, Grad.Sch. SUNY Buffalo, USA ／ Kyoto University, Japan）

요 지

이 논문에서는 한국어학습자 작문 코퍼스(corpus)인「KC *C*orpus (Korean L2 Learner's Written Composition *C*orpus)」개요와 교육 현장에서의 활용 예를 제시하였다. 그리고 더욱 효과적인 한국어교육의 시스템을 구축하고 효율적으로 활용하기 위한 KC *C*orpus의 가능성에 대해 검토를 하였다. KC *C*orpus에서는 한국어학습자가 산출한 언어사용(작문)의 문제점을 객관적 데이터를 바탕으로 분석할 수 있으며, 분석 결과를 한국어교육 현장에 쉽게 피드백할 수 있다는 점에서 한국어교육에 있어 매우 유용한 도구라고 생각한다. 현시점에서의 KC *C*orpus의 과제로서는 (1) 학습자의 주된 한국어학습 기관이 한정된 점, (2) 상급 수준의 데이터가 부족한 점, 그리고 (3) 첨삭이나 형태소분석의 오류가 아직 일부분 남아 있다는 것을 들 수 있다. 앞으로는 한국어학습자 작문 코퍼스(corpus) 규모의 확충을 도모하면서 복수의 첨삭 자를 통한 첨삭을 시행해 갈 예정이다. 또한, 더 효과적인 제2언어교육, 특히 한국어교육에의 응용을 시야에 넣어, 현재 개발 중인 한국어교육 기준(can do)과의 유기적 관계를 모색하면서, 한국어교육에의 활용 가능성을 모색해 가고자 한다.

키워드 : 한국어학습자, KC *C*orpus, 오용분석, 한국어교육에의 활용

韓国語学習者作文コーパス（KC *C*orpus）と韓国語教育への活用[1]

林 炫情(山口県立大学)[2]
李 在鎬(国際交流基金日本語試験センター)[3]
黄 晟煖(立命館アジア太平洋大学)[4]
浅尾　仁彦(SUNY Buffalo/京都大学)[5]

要　旨

本稿では、韓国語学習者作文コーパスである「KC　*C*orpus（Korean L2 Learner's Written Composition Corpus)」について、その概要と教育現場での活用の一例を示した。そして、より効果的な韓国語教育のシステムを構築し、有効なものとして活用していくためのKC　*C*orpusの可能性について検討を行った。KC　*C*orpusは、韓国語学習者における産出的言語使用（作文）の問題点を客観的データに基づいて分析することが可能であり、分析結果を容易に教育現場へのフィードバックできるという点で、韓国語教育のための有効なツールであると考える。現時点でのKC　*C*orpusの課題としては、（１）学習者の主な韓国語学習機関が限定されていること、（２）上級レベルのデータが不足している。また、（３）添削や形態素の誤りがまだ一部残っていることがあげられる。今後は、韓国語学習者作文コーパスの規模の拡充を図りながら、複数の添削者による添削を実施していきたいと考えている。またより効果的な第２言語教育、とりわけ韓国語教育への応用をも視野に入れ、現在開発中の韓国語教育スタンダード（can do）との有機的関係を模索しながら、韓国語教育への活用可能性を模索していく予定である。

キーワード：韓国語学習者、KC *C*orpus、誤用分析、韓国語教育への活用

１．はじめに

本稿では、韓国語学習者作文コーパスである「KC　*C*orpus（Korean L2 Learner's Written Composition Corpus)」を紹介する。また、KC　*C*orpusの誤用分析の集計から得られた知見を韓国語教育現場で活用するための一例を提示する。そして、より効果的な韓国語教育のシステムを構築し、有効なものとして活用していくためのKC　*C*orpusの可能性について検討してみることを目的とする。

２．「KC　*C*orpus（Korean L2 Learner's Written Composition Corpus)」

2.1　コーパス（Corpus）と言語教育

一般に、コーパスは言語研究に使用するために大量に収集された書き言葉および話し言葉のテキストを電子化し、コンピュータ処理できるようにした「電子化テキスト資料」を指す。このようなコーパスは多量のデータを踏まえて語の隠れた特徴や言語の傾向性を明らかにすることができるため、語法研究、社会言語学、辞書編纂、文体論などといった言語テキストを扱う広範な研究領域において活用することができる（石川, 2008)。特に、学習者の発話・作文データを集めた学習者誤用コーパスは、学習者が産出した大量の生データを客観的かつ数量的に分析することで信頼性の高い誤用分析を可能にするとともに、主観的経験から得られた知見とはまた異なった知見を提供してくれる。また、その結果は学習者の立場から間違いやすい目標言語の特性を把握し、学習者に目標言語をより正しく理解させ、できるだけ誤用を少なくするための有効な教授方法や教材開発にもつなげることができる点で、コーパスの言語教育への貢献の余地と利用価値は高い（서상규 외, 2002; 石川, 2008）といえよう。

---

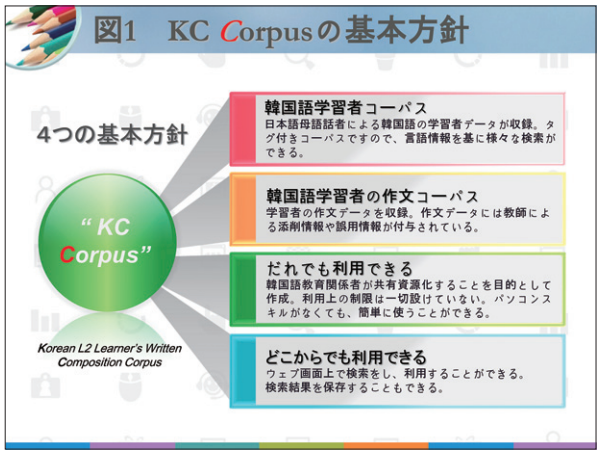
[1]本稿は、2010年9月に行われた第4回山口県立大学学術研究会（優秀研究報告）の報告資料をもとに、加筆を行ったものである。
[2]Hyunjung, Lim, Associate Professor, Yamaguchi Prefectural University, Japan; hjlim@yamaguchi-pu.ac.jp
[3]Jae-ho, Lee, Researcher, The Japan Foundation, Center for Japanese-Language Testing, Japan; jhlee.n@gmail.com
[4]Jung-nan, Hwang, Senior Lecturers, Ritsumeikan Asia Pacific University, Japan; nancy0518@yahoo.co.jp
[5]Yoshihiko, Asao, Doctoral Student, Grad.Sch. SUNY Buffalo, USA / Kyoto University, Japan; asaokitan@ling.bun.kyoto-u.ac.jp

2.2 「KC　Corpus」の開発背景と目的

近年、韓国語のみならず、語学学習者のニーズは一層多様化されており、語学教員に対してはより質の高い教育、学習者のニーズや習熟度に柔軟に対応できる教育コンテンツの開発、そして効果的な教授法の支援などが求められている。このような状況のなか、学習者コーパスはその活用が多方面において期待されている。

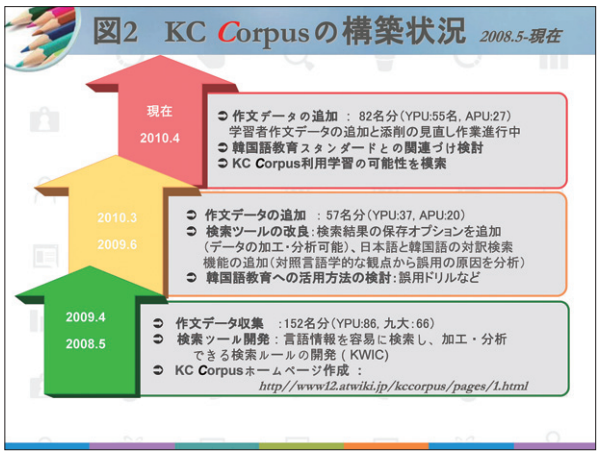
一方、韓国語における学習者コーパスは、延世コーパス[6]のほか、いくつかの学習者コーパスがあるが、一般公開されているものは極めて少なく、検索ツールにおいてもその使用方法が容易でないため、学習者コーパスを活用した研究は十分とはいえない（고석주 외, (2004) 서상규 외, 2002)。また、学習者の誤用分析においては学習者の学習環境は重要な変数要因になりうる。しかし、既存の韓国語学習者コーパスは韓国国内で韓国語を学習する学習者のデータを収集したものがほとんどであることから、海外で、特に日本で韓国語を学習する学習者の特性を反映していないのが現状である。

そこで、以上の問題点を踏まえ、KC　Corpusでは、日本の大学で韓国語を学習する日本語母語話者を対象に、作文データを収集し、電子データ化を行う。また、教師への共有化を前提にした使いやすい学習者コーパスの構築を目的とした。具体的には、複数の言語情報（形態素情報、誤用タグ、添削情報）を付与することで、誤用分析に適したコーパスの開発、また、研究・教育者の様々な利用目的に応じた情報抽出が可能で、Webブラウザ上での検索環境を提供するといったユーザフレンドリーな検索環境構築を目指した。さらに、KC Corpusのデータにおいては「集めたけど公開できない」という事態を避けるため、データ収集時に著作権処理も同時に行うことで、著作権問題においてもクリアしている。図１はKC Corpusの基本方針を示したものである。



2.3　KC Corpusの構築状況[7]

KC Corpusは2008年度から開発をスタートし、2009年度に第２回目のデータ追加と検索ツールの改良を経て、2010年度に第３回目のデータ追加のための作文データの収集を終え、添削の修正を行っている段階である。KC Corpus構築の現在までの進行状況を年度別に示したのが図２である。



2.4　KC Corpusの全体設計図と構築手順

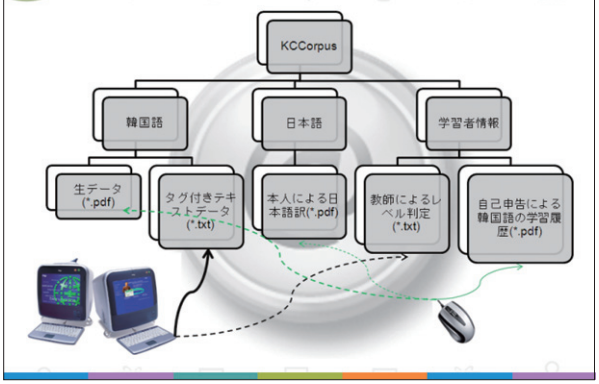
KC Corpusは（１）「学習者による韓国語作文」、（２）「その母語訳（日本語）」、（３）「学習者情報」の３つのデータベースからなる。また、「学習者による韓国語作文」には「生データ（*pdf)」と「タグ付きテキストデータ（*txt)」、「学習者情報」には「教師によるレベル判定（*txt)」と「自己申告による韓国語の学習履歴（*pdf)」がそれぞれ含まれている（図３)。

また、構築手順は図４に示した通りである。（１）データ収集では、韓国語の作文、その日本語訳、学習者履歴、公開に関する確認書（使用承諾書）を紙媒体で作成してもらった。（２）電子化では収集したすべてのドキュメントを電子ファイル化した。そして、（３）

[6] 延世コーパスは延世大学の語学堂の韓国語学習者を対象にデータを収集したもので、規模は26万語節（2002年現在)。

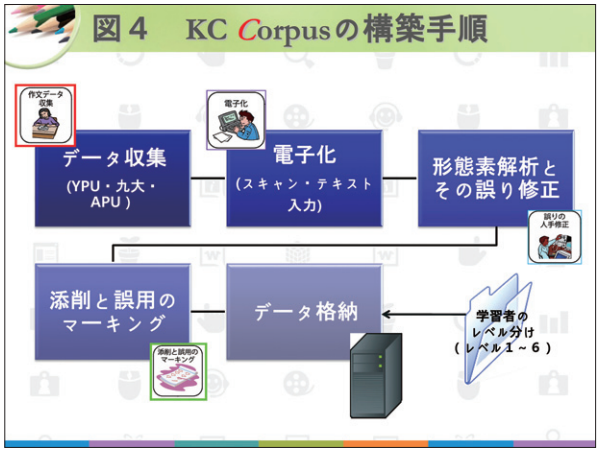
[7] 本研究は、【Korean Studies Grant 2008（課題番号：AKS-2008-R15)：2008年5月－2009年4月（研究代表者：林炫情)「韓国語教育支援共有資源化のためのコーパス構築：日本語母語話者の作文データベース化を中心に」】と【平成21年度・山口県立大学学内研究助成金（基盤研究（A))：2009年6月－2010年3月（研究代表者：林炫情)「韓国語学習者作文コーパス（KC Corpus）と韓国語教育への活用」】による補助を受けた。

図３　KC Corpusの全体設計図



지능형 형태소 분석기(知能型形態素分析機)を使用して形態素解析を行い、必要な言語情報を付与した。解析の誤りについては人手で修正を行った。基本的なタグセットは「21세기 세종계획말뭉치（21世紀セジョンコーパス）」のタグセットと同じである。（４）添削と誤用のマーキングでは、すべて人手で語節単位での添削を行いながら、文法的ミス、表記的ミス、文体的ミスの３種類に分け､それぞれの誤用タグを付与した。複数の誤用については、区切り文字を入れるとともに複数の誤用タグをつけ、いずれの検索条件でもヒットするようにした。（５）学習者のレベル判定はデータの格納時に行った。学習者のレベル判定の基準は、学習者の韓国語関連の検定試験資格、作文作成時の学習レベルと学習歴、留学の有無と期間などを総合して６段階レベルで判定を行った。構築手順の詳細は、林・李・曺・浅尾（2008）、임현정（2009）、李・林・浅尾・曺（2009）、李・林・曺・浅尾（2010）を参照。

図４　KC Corpusの構築手順



2.5　KC Corpusの使用法

現在、KC Corpusは、Web上（http://www12.atwiki.jp/kccorpus/）にて全文データを無償でダウンロードできるようになっているが、アクセスからデータ保存までの使用方法は下記の通りである。

2.5.1 KC Corpus（http://www12.atwiki.jp/kccorpus/）のホームページにアクセスし、メニューの使用法をクリックする。

図５　KC Corpus機動画面

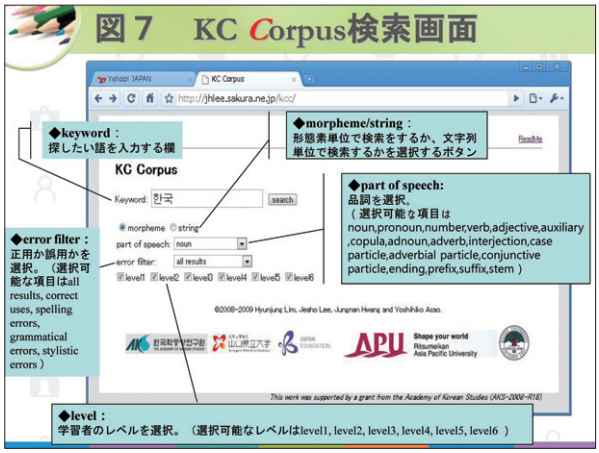
2.5.2 http://jhlee.sakura.ne.jp/kccをクリックする。

接続ダイアログが表示されたらID「kor」とパスワード「kwickwic」を入力する。パスワードを設定したのは、入り口を一本化するためのもので利用を制限するためのものではない。

図６　KC Corpus接続ダイアログ

2.5.3 検索オプション（morpheme/ string）を指定して「検索」ボタンをクリックする。

図７　KC Corpus検索画面



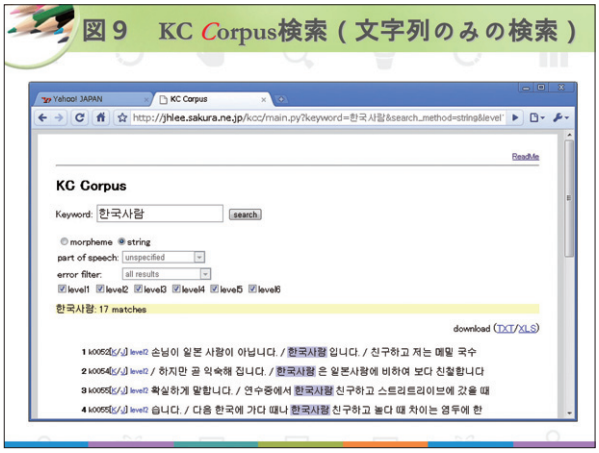
■形態素単位での検索

簡単な検索の場合、すべての単語は形態素単位で入れ、動詞、形容詞の場合は「-다da」を除いた語幹のみ入力する。また、助詞の場合は、前接名詞のバッチムによる異形は別々に検索する。絞り込みで検索したい場合は、「検索語＋品詞」で検索を行うことができる。例えば「가ga」と入力するだけでは、動詞の「가다gada（行く）」と助詞の「가ga（が）」が共にヒットする。動詞のみヒットさせたい場合、あるいは助詞のみヒットさせたい場合には、part of speechで品詞を指定する。また、「検索語＋添削情報」で検索を行うことも可能である。例えば「가다gada（行く）」の正用例だけをヒットさせたい場合は「가ga」＋「correct uses」で検索する。誤用例を見たい場合は「errors」を選択する。誤用例の中でも文法的な誤用例のみを見たい場合は「grammatical errors」、綴りの誤用例を見たい場合は「spelling errors」、文体的なエラーを見たい場合は「stylistic errors」を選択する。「検索語＋レベル」で検索を行う場合は、初級レベル（level１）から上級レベル（level６）の選択が可能である。

■文字列のみの検索

形態素を超える単位を検索する（複合的な要素）場合は、stringボタンをクリックの上、キーワードを入力する。

図９　KC Corpus検索（文字列のみの検索）



2.5.4 検索結果を確認する。

全体のヒット件数が表示される。また、学習者ID｜元のPDFへのリンク【K/J】｜レベル【level２－６】｜KWICデータ｜添削情報(誤用タグ）の順で結果が表示される。元のPDFへのリンク【K/J】をクリックすると、元の作文データをPDFファイルで見ることができる。日本語データを見たい場合は「J」を、韓国語のデータを見たい場合は「K」をクリックする。例えば、「보다boda」の全用例をヒットさせてみると図10のような画面が表示される。ただし、検索結果画面に関する説明は表示されない。

図８　KC Corpus検索（形態素単位検索）

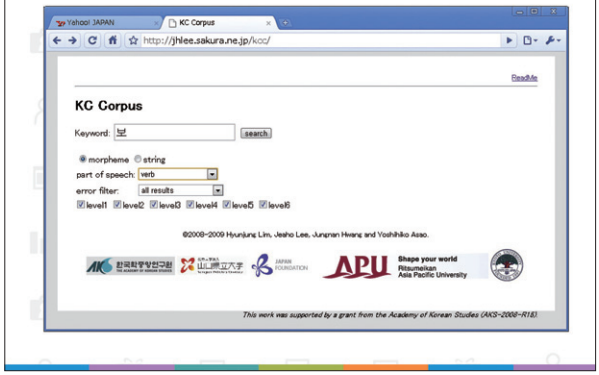
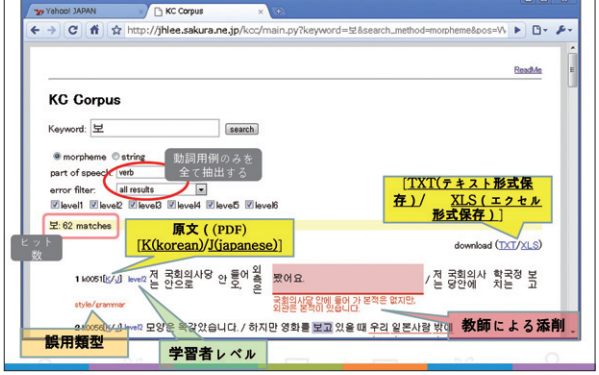


図10　KC Corpus検索結果画面



2.5.5 検索結果を保存する。

download（TXT/XLS）では、検索結果を保存することができる。テキストファイル形式で保存したい場合はTXTをクリックする。クリックするとウェブ画面上（図11）で結果が表示される。コピー &ペーストで結果を保存することができる。

図11　テキストでの保存結果

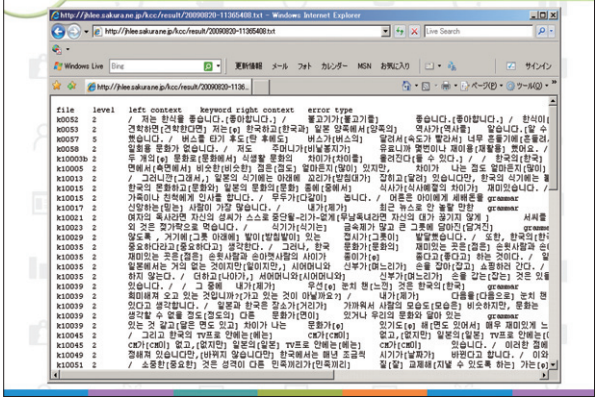


図12　エクセルダウンロードのダイアログ画面

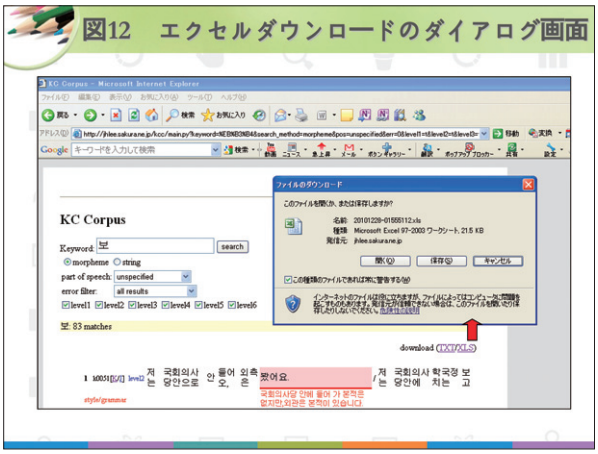
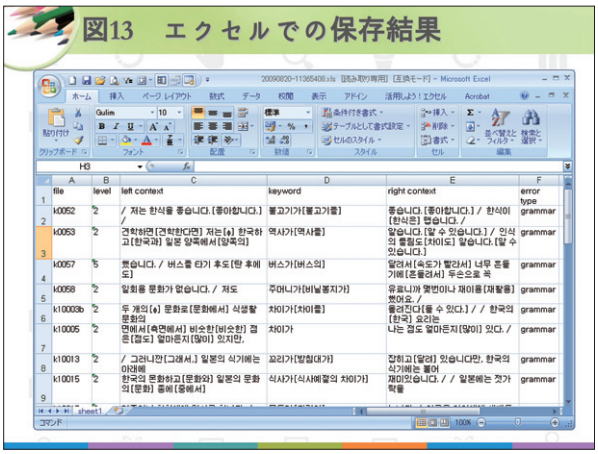


図13　エクセルでの保存結果



また、XLSはエクセルファイル形式で保存する場合にクリックする。クリックするとエクセルのダウンロードダイアログが表示される（図12）。図13はエクセルファイル形式での保存結果である。

３．KC *C*orpusの統計分析

3.1　全学習者データの集計

2010年10月現在まで集めた学習者作文データの総数は291名分（内訳は、山口県立大学178名分、九州大学66名分、立命館アジア太平洋大学47名分）である。ただし、2009年4月以後に収集したデータについては、現在添削の見直しを行っていることから、本稿では、第１回目に収集した152名分のデータのみを数値化し、統計処理を行った。152人の学習者から産出した総語節数（語節のトークン頻度）は20905語節で、一人あたりが産出した平均は137.5語節であった。外国人学習者が産出したデータの平均語節が、初級の場合は60－70語節を超えるのが難しく、中・上級の学習者の場合も100－120語節以内が多い（고석주 외, 2004）ことを考慮すると、少ない数のなかでも本データの産出量はある一定のレベルはクリアしているといえよう。また、誤用総語節数は4988語節のうち、誤用語節が占める割合は平均23.9であった。

図14で分かるように誤用類型は、文法ミス（形態・活用、文法要素の脱落などといった活用や文法的側面での誤用）が3808語節と最も多く、次に表記ミス（韓国語にはない文字などの誤用）、文体ミス（語順、表現や語用論的側面での誤用）の順であった。総語節のなかで誤用語節が占める割合は、各18.2%、2.9%、2.7%であるが、全体誤用を100でみた場合、それぞれの誤用が占める割合は文法誤用が76.3％、表記誤用が12.3%、文体誤用が11.3%となる。

図14　作文データ全体の統計情報

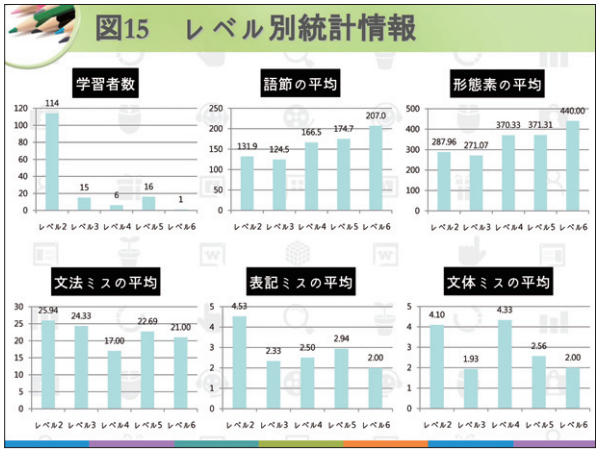
区分	頻度
学習者総数	152
語節のトークン頻度（出現頻度）	20905
形態素のトークン頻度	45496
文法誤用（語節）	3808
表記誤用（語節）	615
文体誤用（語節）	565

注．頻度の統計は、2009.4以前に格納されたデータのみ（152名分）を数値したものである。2009.4以降に収集したデータについては、現在添削の見直しのためデータから除外した。

3.2　レベル別・類型別誤用分析

レベル別[8]の誤用分析の結果をグラフで示したのが図15である。学習者数はレベル２に偏っている。中級から高級にかけてのデータが少ない点が今後のデータ収集の課題として残る。総語節数はレベルが上がるにつれて語節数も増加する傾向が見られた。全レベルにおいて最も多かった誤用類型は文法ミスであった。誤用類型の特徴をレベル別にみると、文法ミスはレベル２において顕著に高く、レベル４で最も低いことが分かった。つまり、韓国語学習を始めて間もない学習者の場合は、助詞の使い分けに難しさを感じるようであるが、一定の学習期間を経るとその使い分けも徐々に安定してくるようである。レベル４より上級のレベル５とレベル６の学習者の文法ミスが増えたり、再び減ったりすることは、形態や活用の誤用よりは、助詞などの文法要素の脱落などに起因するものと思われる。次に、表記の誤用はレベル２において最も多いことから、初級の学習者に対する表記教育をもっと強化する必要があることが示唆された。

最後に、表現や語用論的側面の間違いである文体ミスでは、レベル３が最も少なく、レベル４が最も多かった。文法ミスで最も少なかったレベル４の学習者が文体ミスでは最もミスを犯していることは大変興味深い。この結果から、文法的知識がある程度安定してきたレベル４の学習者については、語用論的側面での学習サポートが更に必要であると思われる。



3.3 誤用分析の一例

誤用分析を韓国語教育現場で活用するための一例として、ここでは、韓国語の多義語副詞である「잘jal」について取り上げる。韓国語副詞「잘jal」は『ハングル検定公式ガイド・合格ドウミ』では５級の語彙として掲載されており、その意味は「①立派に、上手に、うまく、②詳しく、十分に、③無事に、④よく、しばしば、⑤正しく、⑥よろしく」などが代表的な日本語訳となっている[9]。つまり、「잘jal」は初級レベルの語彙ではあるが、その意味が多義に至っていることから、韓国語学習者にとってはその習得が容易でないことが予想される。そこでこの仮説を検証するため、検索ツールから「잘jal」に対応する日本語を抽出してみた。図16は「잘jal」に対応する日本語、「よく」に対応する韓国語の用例数をそれぞれグラフで示したものである。

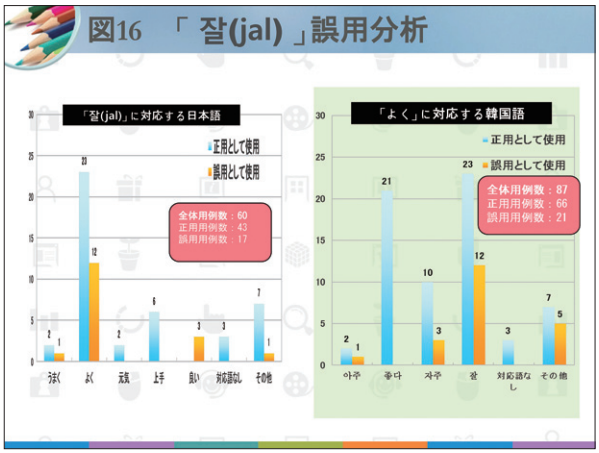


図16から分かるように、韓国語の「잘jal」には「うまく、よく、元気、上手」などが対応して使われている。そのなかでも特に「よく」の対応が顕著であった。誤用例に注目してみると、「잘jal」と「元気」、「잘jal」と「上手」の対応では特に誤用がみられなかったのに対し、「잘jal」と「よく」の対応において誤用が集中する傾向がみられた。一方、日本語の対訳データ[10]から「よく」をキーワードにして対応する韓国語

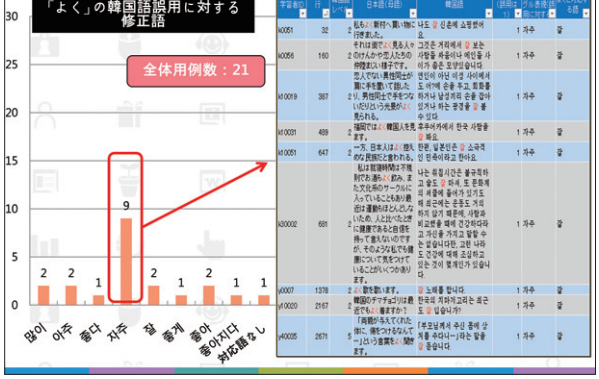
[8] KC *C*orpusでは、学習者レベルを全６レベルと分けており、レベル１からレベル６の順でレベルは高くなる。今回の作文データの収集は、「90分授業の受講経験が28から30時間程度で、450語程度の基礎的な語彙と基本文法に対して理解が定着しており、決まり文句としての挨拶やかんたんな質疑応答ができる」ハングル検定能力試験５級程度以上のレベル２以上の学習者を対象に行った。各レベルの設定基準については林・李・曺・浅尾（2008）、임현정(2009)を参照。

[9] 李・井佐原（2006）では、世宗コーパス（韓国語の均衡コーパス）を使って韓国語の「잘jal」のデータを収集し、クラスター分析で語義分類を行っているが、分析の結果、様態解釈、程度解釈、頻度解釈、態度解釈の４つの意味パターンが見られたことを報告している。

[10] KC *C*orpusでは、韓国語作文と学習者自身による母語訳が対訳形式で検索できる。対訳形式の検索機能を設けたのは、韓国語と日本語の双方向での検索が可能になることで、母語からの誤用の影響を探ることができる。また、強いては対照言語学的な知見のための有効な資源の提供が可能になると考えたからである。

の表現を抽出してみた結果、日本語の「よく」に対しては「아주aju，좋다johta, 자주jaju, 잘jal」と対応していることが多かった。そのなかでも誤用が最も多く見られたのは日本語の「よく」を韓国語「잘jal」に対応させたケースであった。さらに、日本語の「よく」に対応する21の誤用例について、正しい言い方に置き換えた添削後の表現をみると、「 자주jaju 」を用いるべき文脈に対して「잘jal」を対応させた誤用例が最も多かった（図17）。

図17　「よく」の誤用例に対応する添削語



上記の分析結果を踏まえ、学習者には日本語の「よく」は大きく分けて「それをする/した能力・行為・作用・結果が十分であること」ことと、「頻繁に～する」という頻度を表す（市川（編）2010）。後者の意味で「よく」を用いる場合、韓国語は「잘jal」ではなく、「자주jaju」を用いることを強調して指導する必要がある。また、日本語では副詞の位置は比較的自由であるが、韓国語では修飾する動詞や形容詞の直前に置くのが自然である（油谷, 2007）こともあわせて説明しておくことが必要であると思われる。

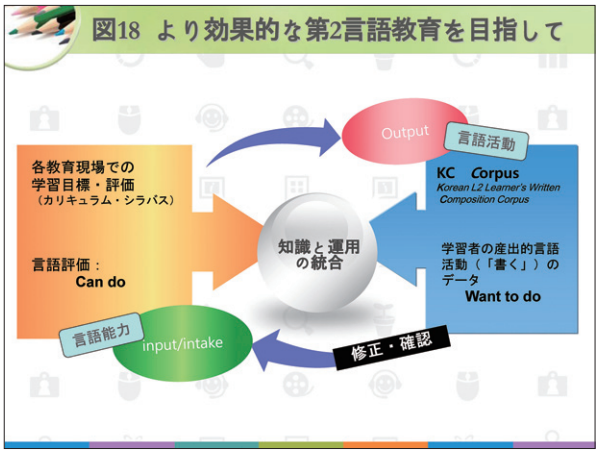
４．より効果的な韓国語教育のシステム構築とKC *C*orpusの活用

教育の最終目標は、学習したことを的確に使用でき、自ら次の学習目標が設定できる、自律した学習能力をもった自立した学習者の育成である。これは言語教育においても同様のことがいえよう。つまり、言語教育においての学習者の自立とは、学習者が学習した内容（言語能力）を的確に正しく運用でき（言語使用）、自ら次の学習設計が可能になる段階のことを意味する。しかし、第２言語習得の分野では、学習者の心理的affect[11]が言語習得に少なからず影響を及ぼすことが報告されている（田所, 2001）。つまり、学習者自身の使用可能な言語能力がいつもどこでも発揮できるとは限らず、学習者の不安の状況によって言語活動（使用）と言語能力は異なるのである。

また、迫田（2008）では、「わかる」と「できる」が異なっていること、「誤用は学習者自身の言語規則の検証の表れ」であると述べている。そのため、教師は学習者の言語習得を促進させるために、学習者がどのようなところで習得の難しさを感じているのか、また、どのようなスキルが必要かを常に把握しながら、学習者の不安を少しでも取り除かせて的確に学び続けさせられるように指導していく必要がある。

一方、教育現場での学習目標やそれを評価するための学習者側の言語能力を「can do」とすれば、学習者の作文データを集めたKC　*C*orpusは、学習者の産出的言語活動の一つである「書く」に対する「want to do」の産物である。従って、KC　*C*orpusから得られた知見（例えば、学習者個々の習得状況や誤用のパターン）を、カリキュラムや教材開発に繰り返し反映していくことは、最終的には学習者自らが自分の学習を「計画・モニター・評価」するといった、学習者の自立を促す第２言語教育の支援につながると考える。

図18　より効果的な第2言語教育を目指して



[11]Affective Filter Hypothesis（情意フィルター仮説）
学習者が持つ言語学習に対する感情的な壁が、第２言語および外国語習得に影響を及ぼすとした仮説。学習者がたとえ充分な量の理解可能なインプット（comprehensible input）を受けていても、その学習者側に不安や学習意欲の欠如、自信喪失などの心理的問題があると、それが障壁となり、インプットが学習者の中に入りにくくなる。その結果、言語習得の進展に支障が生じるとされる【第２言語習得（SLA）用語集：http://www.modern.tsukuba.ac.jp/~ushiro/Publishing/SLAglossary.htm】

５．おわりに

以上、KC　*C*orpusの概要と韓国語教育への応用の一例を簡単に示してみた。現時点でのKC　*C*orpusの課題としては、（１）学習者の主な韓国語学習機関が限定されていること、（２）上級レベルのデータが不足している。また、（３）添削や形態素の誤りがまだ一部残っていることがあげられる。今後は、韓国語学習者作文コーパスの規模の拡充を図りながら、複数の添削者による添削を実施していきたいと考えている。またより効果的な第２言語教育への更なる応用を視野に入れ、特に現在開発中の韓国語教育スタンダード[12]との有機的関係を模索しながら、KC　*C*orpusのより効果的な韓国語教育への活用可能性を模索していきたい。

参考文献

石川保子（編）（2010）『日本語誤用辞典』スリーエーネットワーク

石川慎一郎（2008）『英語コーパスと言語教育』大修館書店

李 在鎬・井佐原 均（2006）「統計的手法に基づく韓国語副詞「jal」の一考察」日本言語学会133回大会, 304－309.

李在鎬・林炫情・浅尾仁彦・曺美庚（2009）「韓国語学習者作文コーパス（KC Corpus）について」朝鮮語教育研究会第10周年大会（東京大学）発表資料

李在鎬・林炫情・曺美庚・浅尾仁彦（2010）「韓国語学習者コーパス（KC Corpus）について」『朝鮮語教育－理論と実践』5, 134－137.

林炫情・李在鎬・曺美庚・浅尾仁彦（2008）「韓国語学習者コーパス構築：韓国語学習者作文コーパスにおける検索ツールの開発」『信学技報（2008－40)』電子情報通信学会, 21－26.

迫田久美子（2008）「プロフィシュンシーを支える学習者の誤用－誤用の背景から教え方へ－」

田所真生子（2001）「外国語学習における学習者の情意要因に関する考察」『ことばの科学』14. 303－320.

鎌田修・島田和子・迫田久美子（編）『～真の日本語力を目指して～プロフィシュンシーを育てる』(凡人社)

ハングル能力検定協会（2006）『「ハングル」検定公式ガイド・合格ドウミ（初・中級編)』ハングル能力検定協会

油谷幸利・金恩愛（2007）『間違いやすい韓国語表現100 初級編』白帝社

고석주・김미옥・김재열・서상규・정희정・한송화（2004）『한국어 학습자 말뭉치와 오류분석』한국문화사

임현정（2009）『한국어 교육자료 공유지원화를 위한 말뭉치 구축: 일본어 모어화자의 작문 데이터베이스화를 중심으로』한국학 중앙연구원 해외한국학 지원사업（학술연구）최종보고서（ASK－2008－R－15）

서상규・유현경・남윤진（2002）「한국어 학습자 말뭉치와 한국어교육」『한국어교육』13（1）국제한국어교육학회, 127－157.

『第２言語習得（SLA）用語集』: http://www.modern.tsukuba.ac.jp/~ushiro/Publishing/SLAglossary.htm

国際交流基金・『JF日本語教育スタンダード』: http://jfstandard.jp/top/ja/render.do

[12]韓国語教育スタンダードとは、「国際的な言語教育の枠組みである「言語のためのヨーロッパ共通参照枠:学習、教育、評価（Common European Framework of Reference for Languages; Learning, teaching, assessment、以下CEFR)」の研究成果を活用し、本学における韓国語教育のさまざまな教育実践内容を明確に説明できる透明性と、教育実践の比較や連携を可能にする一貫性をもたらす韓国語教育共通参照枠（以下、韓国語教育スタンダード)」を指す。韓国語教育スタンダード開発の目的は、第１に、CEFRの共通参照レベル及び例示的能力文を参照にして、韓国語の能力記述文（can do形式の記述）をデータベース化すること。第２に、CEFRに対応した表現の自動抽出ができる韓国語テキストデータベースを作成すること。第３に、１と２をふまえ、「グローバル生活人」として必要な多文化・相互理解のための言語教育スタンダードの観点から本学の韓国語カリキュラムを見直し、改善することである。現在開発中の韓国語教育スタンダード（検討案）では､コミュニケーション言語能力（communicative language competences）とコミュニケーション言語活動（communicative language activities）の考え方や構成はCEFRに準じており、国際交流基金が開発･運用している『JF日本語教育スタンダード』http://jfstandard.jp/top/ja/render.do を参考にしている。なお、本研究は【平成22年度・山口県立大学学内研究助成金（基盤研究（A))「多文化･相互理解のための韓国語教育スタンダードの開発」(研究代表者:林炫情)】の補助を受けた。